

課題名	123 京築・筑豊地帯における果樹の生産安定技術の確立	分類	②
	2) クリの補植のための大苗育苗法		
試験研究年次	62～1年(完了)		
I 目的 クリ園の欠株に大苗を移植することにより補植効果を上げ、樹冠の占有率を高めて、生産性の向上をはかる。			
II 試験方法			
1 試験場所 育苗 豊前分場内ほ場 定植 田川郡赤村			
2 供試品種 筑波			
3 試験区			
(1)育苗期間と定植時期			
62年 63年 1年			
2年苗定植 ○……………◎……………			
3年苗定植 ○……………◎……………			
1年苗定植 ◎……………			
○仮植時期 ◎定植時期			
(2)育苗方法 容器(培土量):ポリ容器(40ℓ、20ℓ)、肥料袋(30ℓ、15ℓ) 基本培土の種類:クリ栽培園土、無栽培土(マサ土) 培土の混合割合:基本培土:焼きもみがら:完熟堆肥=2:1:0.5			
4 栽培管理 追肥;2回、灌水;適宜、薬剤防除;年3～4回、整枝法;開心自然形			
III 主要成果の概要			
1 育苗期間は、2年より3年間の方が、幹周の肥大は増加するが、培土量が20ℓ以下の場合、3年目の幹周増加率が低下することから、培土量は30ℓ以上必要である。			
2 培土の種類は、マサ土よりクリ栽培園土の方が、苗の生育が良好であり、いや地現象は少ないようである。			
3 育苗容器は、ポリ容器を使うと、育苗期間中に資材の劣化が起こり、定植時の持運びに不便であるが、培土量40ℓで大苗が育苗できる。肥料袋は、定植時の持運びや、解体には好都合であるが、培土量は30ℓが限度である。			
4 大苗の現地定植後の生育は、培土量が多く、育苗期間が短い2年苗の方が、幹周及び樹冠容積の増加が良好である。これは、40ℓ以下の培土量で3年間育苗すると根域制限が強すぎて、その後の生育に影響するものと考えられる。			
5 1年苗を現地に直接定植した方が、その後の生育は順調であるが、枯死樹の発生が多くなる。			
以上の結果から、クリの大苗育苗は、園土を主体とした培土を30ℓ以上(ポリ容器:40ℓ以上、肥料袋30ℓ以上)使用し、育苗期間は2年が適正である。			

IV 主要成果の具体的データ

第1表 新梢長及び収量調査

試験区	新梢長 (畑地)	1樹当たり収量			1果平均重	
		62年(畑地)	63年(畑地)	1年(水田)	畑地	水田
ネマモール	70.8 ^{cm}	38.1(157) ^{kg}	63.2(155) ^{kg}	48.1(85) ^{kg}	89.1 ^g	90.8 ^g
アドバンテージ	67.4	21.5(89)	49.4(121)	67.7(119)	74.6	93.4
パイデート	66.8	24.5(101)	48.9(120)	55.5(98)	76.2	92.5
土壤パルス	65.4	39.8(164)	54.8(135)	49.7(87)	81.8	75.5
無処理	63.8	24.2(100)	40.7(100)	56.9(100)	74.8	92.0

注) ()内は前年対比

第2表 地下部調査

(63年)

試験区	土20g当たり センチウ数	根こぶ 発生度	新根発生 状況
ネマモール	51(4)	少~中	+
アドバンテージ	65(15)	少	+
パイデート	5(1)	無~少	+
土壤パルス	82(26)	少~中	+~±
無処理	110(9)	多	±~-

注) ① ()内は、ラセンセンチウ数。

② 新根発生状況、-;なし、±;少ない、+;多い。

V 成果の評価と取扱上の留意点

供試したネコブセンチウの防除薬剤は、イチジクに対して未登録である。登録まで使用できない。

VI 今後の研究上の問題点

VII 資料名

昭和62~平成元年度 福岡県農業総合試験場豊前分場果樹試験成績書
 昭和62~平成元年度 福岡県農総試生産環境研究所果樹病害虫に関する試験成績書